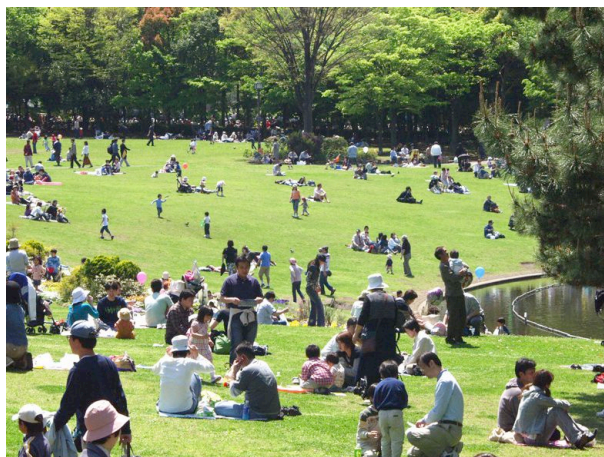


# 序章 「知の地域創造」のために

## (1) 「知の地域創造」センターの構想

多摩中央公園に生まれた「知の地域創造」センターでは、晴れた日にはテーブルと椅子があちこちに置かれ、木陰でカフェを楽しみながら本を読んだり、おしゃべりを楽しんでいます。公園の大池に面した「大芝生広場」では、家族連れがまだ暗い時間からテントを張り、周りの樹の根元で懐中電灯を手にして、セミの羽化を観察しています。観察が終わると創造センターの机で、自由研究のまとめです。

朝の時間帯は、2階でお年寄りが新聞を読む静かなスペースから、公園の向こう側にパルテノン多摩の円柱が望めます。パルテノン多摩の公園側にも、図書館員が選んだ本が配置され、定期的に入れ替えがされています。そこから創造センターまでの道すがら、ところどころで文化財や本の展示が楽しめます。



創造センターの公園側は、公園に溶け込んだデザインで、人々が自由に出入りしています。入り口から入ると、広いギャラリースペースには、古民家と呼応するように縄文土器に活けられた花などの文化財展示や、市民の写真作品が並んでいて、市民のひろばになっています。

このギャラリーは、週に1度は、若者向けのライブスペースに早変わり。パルテノン多摩のサブステージとして親しまれ、デジタルサイネージの画面には、パルテノン多摩のイベントが映し出されています。

午前中からベビーカーを押す親子連れが、にぎやかな1階のフロアに集まり始めました。これからどこにでかけ、どこでランチにするか、本やインターネットで調べています。

午後になると、保育園児がおはなし室にやってきて、本のよみかかせをしてもらっています。障がいのある子どもも、マルチメディアの絵本や布の絵本を大きな声を出して楽しみ、集中しています。

夕方、取引先を回ったビジネスマンがパソコンを使って判例関係のデータベースで調べ物をしています。

学校帰りの学生も、みんなで話し合っただけでしたが、今は気分転換に、マルチメディアブースで多摩市を舞台にしたアニメを楽しんでいます。

あたりが暗くなると、ぼんぼりのように、創造センターが遠くからでも浮かび上がり、そこに行けばだれでも受け入れ、何か見つかるような気がします。

この創造センターに集まる人々は、様々な活動を目にして、本やインターネットで調べ、仲間になったり、教えたり、触発されることで、グループでも、あるいはひとりひとり個室に閉じこもったままでも「知の地域創造」の一員になっています。

この公園を囲む一帯には、心を豊かにしてくれる仕掛けがあふれています。

ひとつひとつのサービスは、海外の図書館や日本の先進的な図書館では、既に実現しているものが少なくないでしょう。でも、多摩中央公園のような広い緑と開かれた青い空の下にそれらを集中させ、様々な文化や芸術を楽しめる「知の地域創造」センターは、他にあるでしょうか。

デジタルサイネージ(電子看板) : は、プロジェクターやモニターに動画や映像や情報を映し出す装置、表現媒体のこと。

## (2) 多摩センターという「知の地域創造」の舞台

昭和46年に多摩ニュータウン一次入居が開始され、京王線、小田急線、多摩都市モノレールが開通。複合した都市機能を有する商業・業務の多摩ニュータウンにおける中心地として、「多摩センター」と名付けられました。

そして、視点をずらすと「多摩センター」は、パルテノン多摩に縁取られた多摩中央公園ができたことで、公園を中心とした生活・文化・芸術の拠点としても生まれ変わり、今日に至っています。

わが国の高度成長期を乗り越えてきた多摩ニュータウンは今、少子化、高齢化の波の中で、経済面でも生活環境の面でも再生に取り組みなければならない時期を迎えています。そのような時代の転換点の中で、多摩市の文化・芸術の中心となってきた多摩センターも、旧来の図書館の枠を超えた「知の資源を集積したセンター」としての新たな図書館を中核に据えることで、「知の地域創造」の拠点として変貌させるならば、「のびやかに生きられるまち」「誇れる故郷のまち」のシンボルとさえなります。冒頭に掲げた将来像は、今すぐには、すべてを一挙に実現できなくても、新たなニーズに支えられて、行政と市民が二人三脚ですすめることで、今と将来の多摩市民の「知の資源」が耕されて、他には類を見ない心の豊かなまちづくりの道しるべとなるでしょう。

## (3) 「知の地域創造」のビジョンに一步近付くために

この策定委員会では、単に中央図書館の機能を検討するのではなく、図書館ネットワーク全体をま

ず考えることとし、検討を進めました。その過程では、ヒアリングによる、市民や図書館員、行政などの様々な意見があり、これまでのアンケートの結果があり、各委員からの提言や議論がありました。そして、「若者」「子どもの空間」「子どもの心の発達」「ベビーカー」「絵本」「障がい者とバリアフリー」「お年寄りの心の拠り所」「コミック・アニメなどの新しい表現ジャンル」「インターネット」「公園との一体化」「文化財」「古民家を活かす」「新しい図書館像」などのことばがつむぎ出され、新しい中央図書館のイメージが膨らんでいきました。

その中で、今の図書館ができないことや、図書館の外（そと）にあるものと「連携」するのではなく、さらに視座を1段高くとってそれらを含めて考えること、これまでの図書館のイメージからはみ出した、公園やパルテノン多摩、近隣の大学に囲まれた環境や、アニメやインターネットも含めたメディア、これまでに利用していない市民への配慮などへと広げたいと、この「知の地域創造」センターとして、さらに「のびしろ」を広くとって考えるべきだとの提言がありました。

「『知の地域創造』センター」。それは今の段階では必ずしも全体像を漏れなく描くことは困難ですが、大切なことは、可能な限り希望に満ちたビジョンを描き出すことでしょう。もちろん、10年後、20年後、30年後には、子どもたちや若者のニーズのシャワーを浴びて、今は想像できないような形に変容していくことと思います。

今この基本構想でイメージを描けるのは、そのセンターの核となる、中央図書館のビジョンです。この基本構想では、将来を希望をこめて大胆に構想しつつ、第一章からの四つの章で、多摩市の図書館ネットワーク全体から、中央図書館の機能へ、そして今後の基本計画という現実の施策へと、フォーカスを絞っていくこととします。

